

別紙 1 - 2

1 奉納刀その1



1 奉納刀その2



平成十年三月吉日 調製

平成十年三月吉日 調製

1 奉納刀その3





5



片刃及豆形物

一六

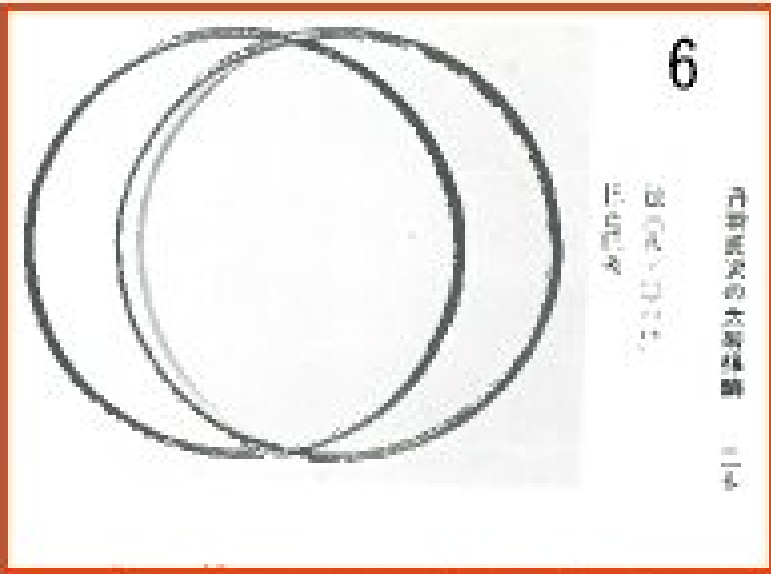
石部 石部・石部

磨入石 一三・四六

石部

石部 石部 石部

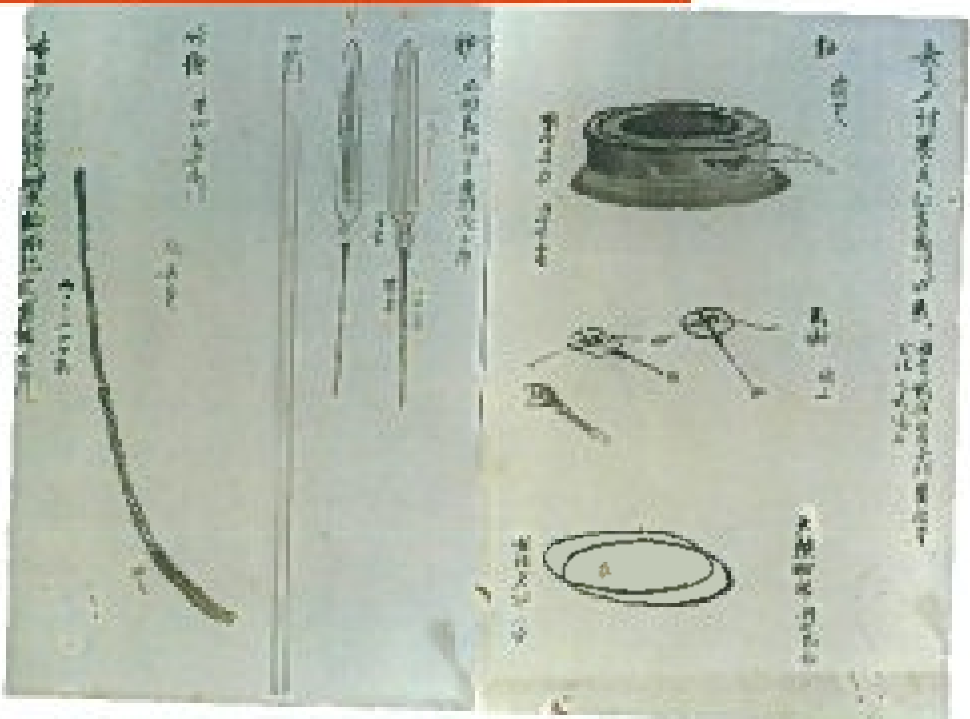
6



石部 石部 石部

石部 石部

石部



石部 石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部 石部

石部



四九五 高久下郡陣場図

一丁

紙本着色

縦一〇四・五センチ

横六三・七センチ

目下見取

名古屋陣場から戦場への戦時
を同式し、全合に戦争の戦
を記した図。

同様の地図が運文文庫にも
現存されており、それには足
南の南白は、前文に戦時一長
又下洲陣場時式とあり、戦時
陣場と記し、足註、又戦時
が細かく記述される。

四九六 長久手御合戦記

一冊
紙本金書
油明書
享和三年



長秋

延和四年正月十三日乙酉除月八日甲子湯野原原野
于時慶長九年甲辰四年

長久手御合戦御記

前掲の八六で紹介した「長久手御合戦記」と同じ複製であるが、本文表記は異なる。菅島地蔵堂に合戦に関するいくつかの記録を収めた「菅島地蔵堂文庫二年（一五九三）」に菅島寺志田知尚によって開かれたが、本文印刷（一六〇一）には既に奥付にならなくなっており、旧題等に変更のきも配になっている。

四九七 長秋軍記

長秋軍記



一冊 紙本金書

今川百十郎具は為守 口圖下代吉藏

永享二年九月五日丹羽次郎左衛門長之丞

明出二年庚申四月

蒲州尾村に於て丹羽次郎左衛門長之丞

本軍記は、時の長久手御合戦八二林の

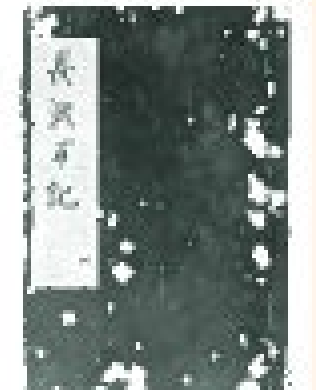
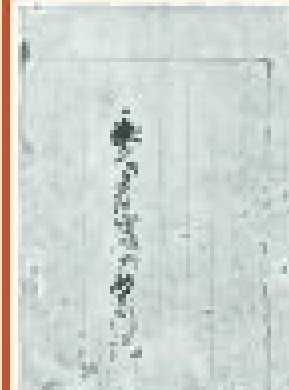
指一が永野代官時に納められたもの文、此官の

11

四九八 軍記

二冊
紙本金書
長秋軍記

10



長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

長秋軍記

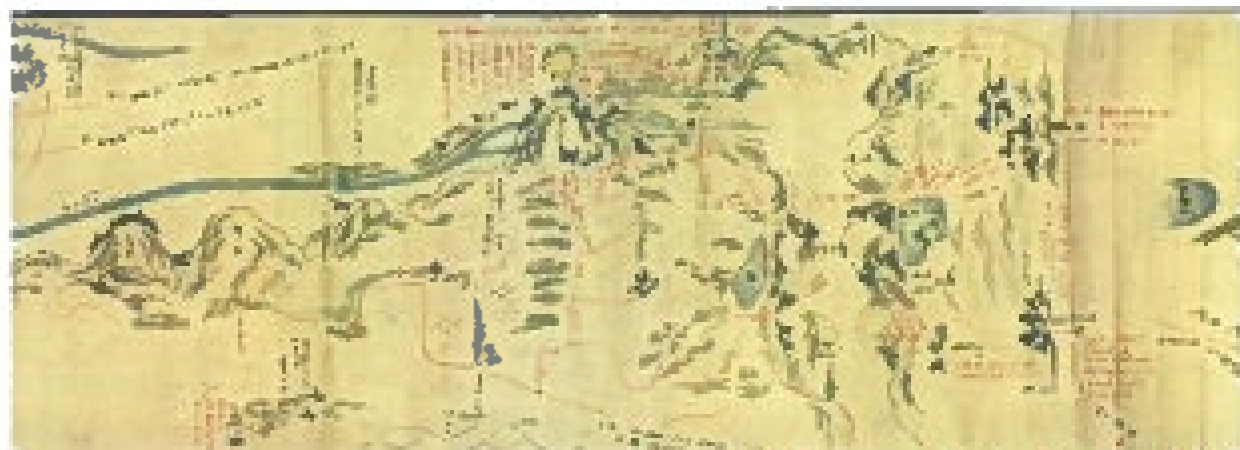
長秋軍記

長久手古戦場保存活用計画より

12

① 「尾州愛知郡長久手之邑」絵図 寛政5年（1793）

江戸時代に古戦場を訪れる多くの尾張藩士に欣赏され、絵図で見所やその区劃の距離等が書かれている。



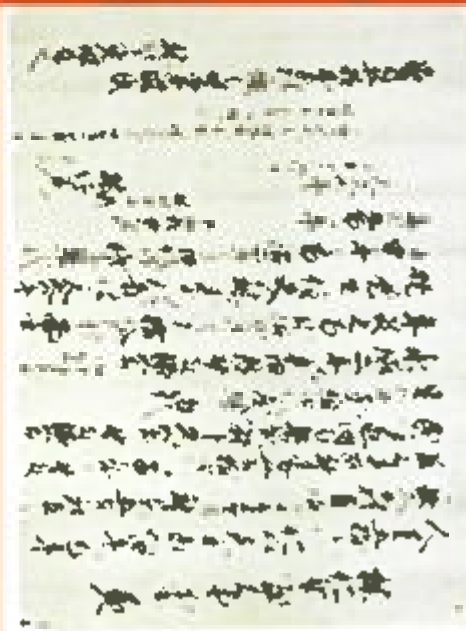
② 長湫古戦場之図 天保11年（1840）



- 色金山
- 橋入塚
- 御旗山
- 止九郎塚
- 美濃塚

13

天保11年（1840）
長久手町史資料編一 資料に加筆（個人蔵）



五四四 林に左衛門殿牧田様書之寛

五四五 林に左衛門殿方之田様書

一丁
紙本墨書
元文五年（一七四〇）
比五巴圖
墨料要約の紙に字を濃淡筆、
「律の調一や」「長年記開録」の
文中に登場する仁左衛門家の田
畑書

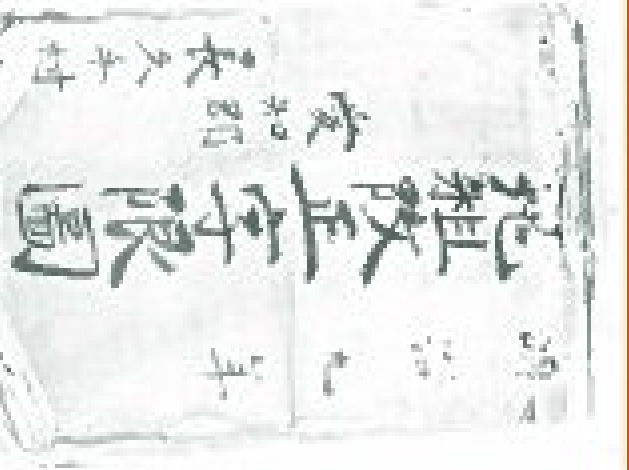
一丁
紙本墨書
延享時代後期
比五巴圖
仁左衛門の一族が、元正年間（
栄川勝家と関係した、その母族）の
少女を妾に迎えた経緯を略記す
るもの。書體には丹州藤島氏流や
大隅小幡、薩摩正阿などとも多少
かぶるが、たゞことか述べられる。
仁左衛門の一族の長は長々に左
衛門、あるいは林左衛門を襲名し、
近世に至る時、長久手村の村役人
を兼ねた。

14

15



五四六 字繪圖



五四七 地割改正字限圖

一組
紙本青墨
北條村
明治九年
長久手町役場藏

一組
紙本青墨
長久手村（現大正町藏）
明治九年
長久手町役場藏



天正拾一年癸未秋後國
 方前々山屋敷田昌寺領等
 悉有御開所処二今度我等
 為新寄進、田地拾貫文目、門前之
 小家三間、右之分悉岩作安昌寺に
 令寄進者也、此上後々未代不可
 有違乱也、仍寄進状如件
 岩作安昌寺雲山和尚繼目
 天正十三年乙酉九月廿六日
 丹羽勘助
 氏次(花押)

丹羽氏次 寄付証文(複製)

天正13年(1585) 安昌寺藏

長久手合戦に徳川家康方の武将として参戦した岩崎城主丹羽氏次が、安昌寺草創の僧、雲山和尚の懇請にあて、当寺への田地などの寄付を証したものの。

この証文については、江戸時代の村勢・地誌要覧『尾張徇行記』をはじめ、いくつかの公的記録に記述がみえる。

天正拾一年癸未之秋、後國
 方前々山屋敷田昌寺領等
 悉有御開所処二今度我等
 為新寄進、田地拾貫文目、門前之
 小家三間、右之分悉岩作安昌寺に
 令寄進者也、此上後々未代不可
 有違乱也、仍寄進状如件
 岩作安昌寺雲山和尚繼目
 天正十三年乙酉九月廿六日
 丹羽勘助
 氏次(花押)

(文應)天正十一年秋開所、すなわち所領を没収されたが、同十三年九月二十六日、安昌寺に田地十貫文と小家三間(小作人の三軒分)を新たに寄進する。
 ※ おそらく天正十三年ころに所領の加増になったものと推測される。氏次は、その後天正十四年に安昌寺を再建している。

梨吉山客島寺修持末那修永修の中

海山八幡社修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中

修持末那修永修の中



九八 天竺列王女

本像 高九尺一
 現於 法華寺
 四天王
 像
 天竺列王女
 像
 天竺列王女
 像
 天竺列王女
 像

六七 天竺列王女像

九八 天竺列王女像



五九 阿彌陀佛坐像
 高 一・七〇米
 長 一・三〇米
 重 一・五〇噸
 本願寺
 阿彌陀佛坐像、本願寺
 阿彌陀佛坐像、本願寺
 阿彌陀佛坐像、本願寺

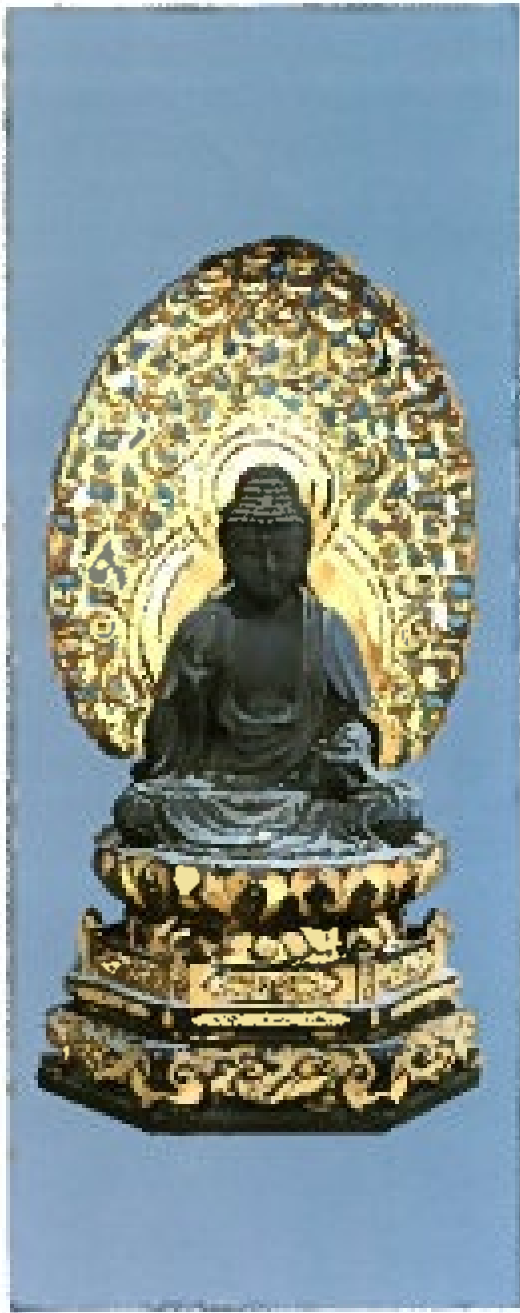


東洋の美術
 一〇〇 一
 一〇〇 二
 一〇〇 三

この像は、その姿、その表情、その衣の垂れ、その手に持った杖の長さ、その背後の光背の形、すべてが、その時代の美術の水準を示している。この像は、その時代の美術の水準を示している。

この像は、その姿、その表情、その衣の垂れ、その手に持った杖の長さ、その背後の光背の形、すべてが、その時代の美術の水準を示している。この像は、その時代の美術の水準を示している。





图五 正定县清凉寺藏

正定县清凉寺藏
 正定县清凉寺藏
 正定县清凉寺藏
 正定县清凉寺藏
 正定县清凉寺藏



图六 正定县清凉寺藏

正定县清凉寺藏
 正定县清凉寺藏
 正定县清凉寺藏
 正定县清凉寺藏
 正定县清凉寺藏



大正 三平院佛堂

本尊 毘盧遮那佛

像高 一八〇・五センチ

坐高 一〇〇・五センチ

像高 四〇センチ

本尊は毘盧遮那佛

の坐像

本尊は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

の坐像は毘盧遮那佛の坐像

十一面觀音菩薩像

本光寺藏 尺三寸五分

鎌倉 大仏師・宗長

金胎 十一面・十一

五明時代 右端の光背の彫刻が

特徴的

昭和二年四月

二月 鎌倉

本光寺蔵の十一面觀音菩薩像は、その姿が

平安朝の十一面觀音菩薩像の特色を

示す



三 絵画

1312 北野神社

1313 北野神社
1314 北野神社
1315 北野神社

1316 北野神社
1317 北野神社

1318 北野神社
1319 北野神社
1320 北野神社



29 遠投三社大明神祭図
岩作村東之切画軸



遠投三社大明神祭図
岩作村西之切画軸
(市指定文化財)









二四

秋村下

祝 三十一、八四七

巻 六十一、八四七

以三三

弘化四年六月四日

巻 六十一、八四七

巻 六十一、八四七

此巻、新を取り得んと三ヶ津
 の池田へ行き掛ひれば、五尺半
 なる蛇、兎もくわえ吞まんどす
 其兎をうばい取らんと立ち止ま
 れば忽大蛇の姿をあらはし、そ
 の文五箇斗になり教にむかふ
 その大ききまことにおそろしく
 恐のありまし、画二紙三に誂れ
 ば、それは止しく好蛇ならんと
 いふをきけばあやうき物ものを
 がれ、よろこびの余りに油西にぞ
 して主前に出納す
 弘化四年六月四日
 当所御主倉地汚紙

二四二 寺島氏公同絵巻

一、

二、

三、

四、

五、

六、

七、

八、

九、

十、



字
繪
圖

明治九年

熊張村



33 字繪図その2





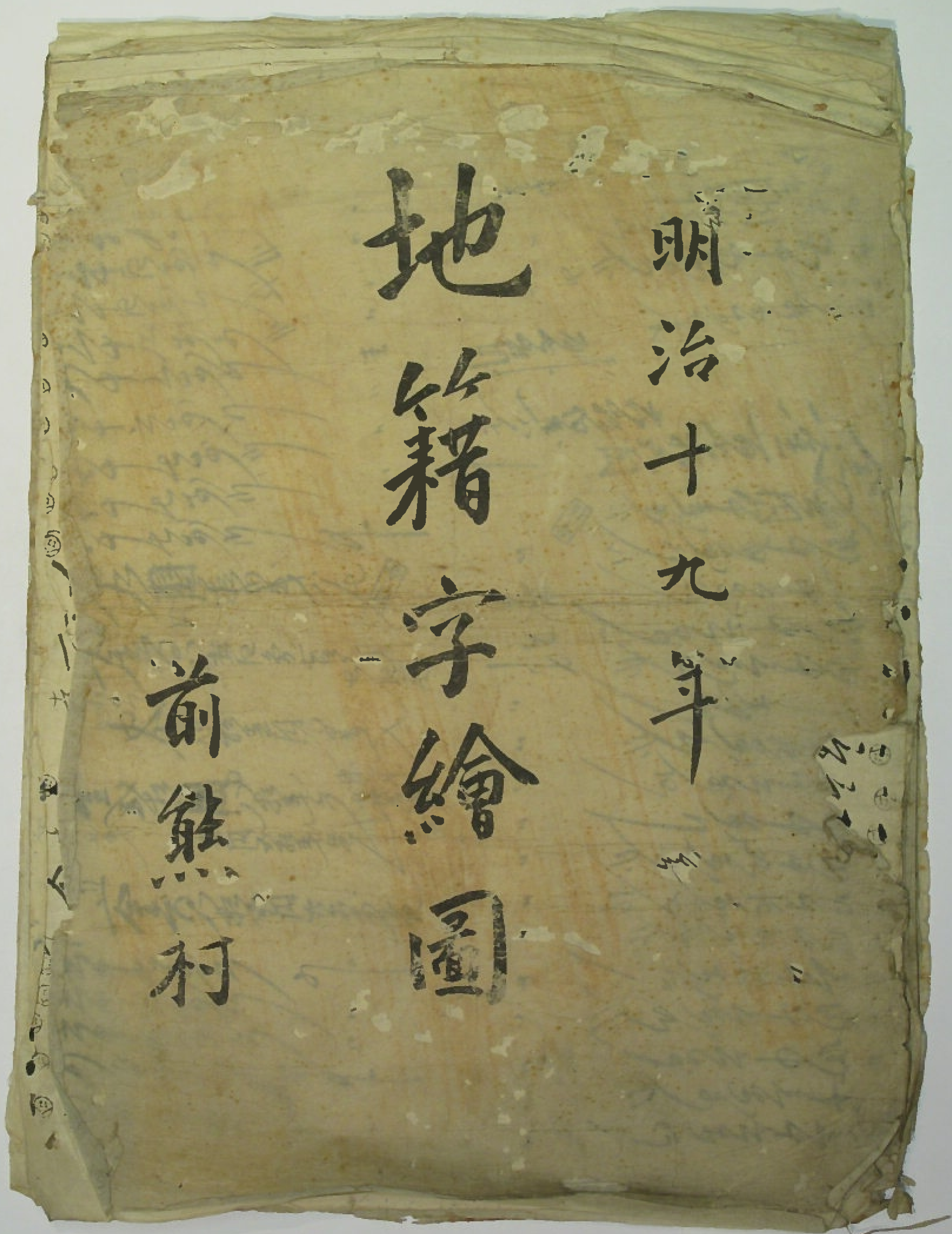
34 地租改正字限圖その2

明治九年

地圖

第貳大區拾三區
尾張國愛知郡
前熊村





地籍字繪圖

明治十九年

前熊村



36 地籍字繪圖その2

37 稲富流大鉄炮
(ケースス奥)

